両親

# 私の履歴書

江頭　匡一
えがしら　きょういち

③

## 厳格な父 剣道の範士

### 母は料理好き、残るレシピ

私は一九二三年(大正十二年)三月二十五日、父江頭佳造、母照代の長男として、母の実家がある福岡県城島町で生まれた。厳格な父と料理好きな母に育てられたことが、後の私の人生に大きな影響を与えたと思う。

父は、福岡県芦屋町で材木商を営む吉田徳造の五男で、東筑中学（現東筑高校）、旧制五高（現熊本大学）、東京大学法学部を卒業後、東大剣道部の先輩であった三菱地所初代会長、赤星陸治氏の勧めで三菱合資会社に入社した。石炭鉱業華やかなりしころ、同社の九州や北海道の主要炭鉱の労務主任、所長などを務めた。戦時中に産業報国会の理事だった関係で、戦後は公職追放で会社を離れた。

こうした父の仕事の関係で、私は小学校を四回変わった。最初に入学したのが北海道美唄市の小学校だったが、このときに、父の部下として配属されたのが東大を卒業したばかりの大槻文平氏（元日経連会長）だった。

学生服姿で家にやって来た大槻氏が帰ったときに、父が母に向かって「大槻は将来、三菱を背負って立つ男になる」と話していたのをよく覚えている。

後に、大槻氏が「私の履歴書」で、父のことを「美唄の労務係主任は江頭佳造さん（故人）で東大の先輩だった。剣道の達人、のちに範士になられた仁である。当時も社宅の隣に道場をつくり内弟子を持っていた。……若い者の面倒みがよく、私なんかも江頭さんがいたので、永続きしたのではないかという感じを持つ」と書いてくださった。

そのお礼にあいさつに伺ったとき、父が語ったエピソードを伝えると、大槻氏は懐かしがってくれた。その後も二十も年上の大槻氏は、私にとって大叔父のような存在感のある方だった。

中学、高校、大学とずっと剣道部の主将だった父は、亡くなるときは剣道九段で範士の資格を持ち、居合も教士の資格を持っていた。家に帰ると、衣を着て袈裟（けさ）をかけ、座禅を組む。非常に厳格な人だった。

それだけに、姉二人、弟、妹の五人兄弟の長男だった私に、父は大きな期待をかけていた。名前も論語の「天下を一匡す(乱れた状態をあるべき正しい姿に戻す、の意)」からとって、一匡としたかったらしい。しかし「ごろが悪い」と祖母らの反対で、匡一と名付けた。期待の大きさに反して幼いころから、反抗ばかりする私を見て、父は「やはり名前を反対にしたのが裏目に出たのかなあ」と嘆いていたほどだ。

戦争に負けたショックから、父はかつての三菱の幹部社員としての誇りを失い、世を捨ててしまった。それでも私が働いて得たお金を渡そうとすると、「おれのお金とお前のとは価値が違う」と言って自分では頑として受け取ろうとしない。その硬骨漢ぶりは変わらなかった。

晩年まで毎日剣道を続け、範士として社会人や修猷館高校の生徒にも教えていた。酒も強く、毎晩五合の晩酌を楽しみながら、八十五歳で静かに天命を全うした。反発し続けてきた父になぜもっとやさしくできなかったのか。それが今では悔いになっている。

晩年まで毎日剣道を続けた父佳造

母は、福岡県城島町で四百年続いた造り酒屋、江頭酒造の一人娘として育った。大正六年に父は縁あって江頭家に婿養子に入り、江頭姓となったが、分家筋が家業を継いだ。

母の一番の思い出というと、午後三時ごろから三時間ほどかけて父とわれわれ子どものために夕食を準備していたことだ。私たちもよく手伝わされた。今でも分厚い料理のレシピが三冊私の手元にある。後年、私が一生の仕事として飲食業の道を選んだのは、この料理好きな母のおかげで私も食べものが好きだったことが原点になっていると思う。

（ロイヤル創業者取締役）